

如春斎落款の屏風について

枝 松 亜 子

二〇二二年に行われた関西学院大学が所蔵する屏風絵の調査に加わって、いくつかの作品を拝見する機会を得た。その中に如春斎の落款のある六曲一双屏風があった。二〇一七年に所属館（「公財」西宮市大谷記念美術館）で勝部如春斎の展覧会を行ったこともあり、この作品についての所見を述べてみたいと考える。

勝部如春斎について

勝部如春斎は享保六年（一七二二）、西宮の造り酒屋の家に生まれた。裕福な身の上で家は兄が継いだ、兄弟仲は良く、株を譲り受けるなどして資産も持っていた。江戸に居た狩野派の棚橋栄春斎の教えを受けたと伝わるが、如春斎が江戸に行った形跡はないため、これは森狙仙の兄、森陽信の師であった棚橋正盈（永春斎）のことではなかったかと思われる。最初は画を余技として学んだようであるが、妻子を相次いで亡くす不幸が続くようになった頃からは画に専心する事になり、宝暦十四年（一七六四）に左大臣九条尚実より「如春斎」の号を賜った。現在知

られているのは、その後天明四年（一七八四）に没するまでの二十年間の作品である。森狙仙の師であったともいわれ、池田の出身で懷徳堂に深い関わりがあった荒木李谿に絵の手ほどきをしたとされるが、没後は次第に忘れられていった。

その後百五十年を経て、西宮出身の画人として江戸時代に唯一名の知られた存在であった如春斎を顕彰する展覧会が、地元西宮で昭和九年（一九三四）と昭和四十四年（一九六九）に有志により開催されることになった。西宮市内に存する作品を集めており、特に昭和九年の展示の折には、その後西宮大空襲によって消失、あるいは不明になった作品や資料が展示された。またそのときの成果がまとめられた『勝部如春斎伝』（一九三四年・増補改定版一九三五年 伊藤保平編集・発行 非売品）は、如春斎の根本資料として重要なものである。

西宮市大谷記念美術館で展覧会を開催した際には、摂津池田など西宮以外の土地からも作品を集め、現在知られている代表作を網羅する展示を行った。展覧会調査中、また展覧会後にも、作品が新たに見いだされ、中には代表作と呼べるような作品の存在も更に明らかになってきて

いる。

勝部如春齋の作風

現存している代表作としては、まず寺院の襖絵が三点知られている。池田市弘誓寺の「松桜に孔雀図」「松楓に孔雀図」、豊中市養照寺の「秋草に鶴図」、尼崎市浄専寺の「花鳥図」がそれで、強い個性があるものではないが、いずれも極彩色の華やかな作品で、大画面を破綻なくまとめ上げている。その他、「小袖屏風虫干図卷」（大阪市立美術館蔵）は庭園の様子から座敷に虫干している屏風の細かい描写が素晴らしい豪華な絵巻であり、東福寺にある明兆の「三十三観音図」を摸した西宮市茂松寺の「三十三観音図」三十三幅は、水墨と彩色が縦横に使い分けられており、明兆の作品にあつた厳しさが軽減され、線の美しさや観音の表情の柔らかさが際立つ作品である。これらに比べて、狩野派の粉本を用いて制作されたと思われる水墨山水などは、個性が感じられるものは少なく、あつさりともまとめられている。大画面を構成する力があり、細密画や彩色画には優れた技量をみせるが、上方に根ざした狩野派としては、極めて穏健な作風の絵師だったといえるだろう。

如春齋落款の作品について

さて、この作品は六曲一双の貼交屏風である。屏風の寸法に合わせる

ため、紙面の上下に銀地を貼り足している。一枚ずつ個別の画題で描かれていて、それぞれの扇に落款印章がある。画題は右隻「高士図」「雪景図」「福祿寿図」「山水図」「山水図（帰農図）」「月に竹図」、左隻は「観瀑図」「山水図」「布袋図」「梅鳥図」「高士図」「花束図」となっている。全て水墨のみを用い着色はない。戯画的な速筆で描かれており、粗雑ではあるが筆の勢いは途切れることなく、描き慣れている印象を受ける。画題は一見不規則ながらも、あるが、人物と山水または花鳥を交互に配している。落款は「台賜如春齋」、印章は朱文方印「典寿之印」で、如春齋の最も良く知られている落款印章である。落款には勢いがあり線を引くのに躊躇った形跡はない。ただし、どの扇においても「如」の「口」の部分完全に省略されており、私がこれまで管見した



水墨人物図屏風

作品の落款にはそのような例はなかった。また、印章に関しては方印としては若干縦長であり、これまで知られているものとは異なる印影である。

如春齋の水墨画には、狩野派の粉本に従って、あっさりとした仕上げられた作品が比較的多く見受けられ、その中にはかなり粗雑な仕上がりのもも含まれていた。そういった観点から見ても、この作品は更に簡略で粗っぽい出来のように思われる。以上のことから、この作品は如春齋の良作としては認めがたいものであるが、それでも狩野派の粉本をそのまま貼り交ぜたような形式の屏風が江戸期に作られたということ、それが如春齋の作として珍重されていたという事例としては、地元西宮に伝わっていたことも含め、貴重であると考えられるのである。

(公財) 西宮市大谷記念美術館 学芸課長